★URL:http://w3.ias.tokushima-u.ac.jp/sgp/★　　徳島大学　全学共通教育センター

週刊 学びのコミュニティー

第 64 号

平成 22 年 10 月 27 日発行

海外出張報告 第2弾！ーモンゴル編その2ー

大橋眞教授、齊藤隆仁准教授、佐藤高則准教授、光永雅子特任助教、仙才守さん（社会人ボランティア）、塩川奈々美さん（総合科学部１年生）が 9 月 4 日～9 月 11 日の間、**モンゴル**へ研究交流や授業開発プロジェストの提案に行きました。この交流の意義や取組内容について報告いたします。

モンゴルについて

8 月のパプアニューギニアに続き、9 月はモンゴルを訪れました。ウランバートルとその周辺を見て回ったのですが、市内はとにかく建築ラッシュです。銅・モリブデン・石炭・金などの鉱業を中心とした外貨獲得によるとのことです。私自身は体験したことがないのですが、日本の第 2 次世界大戦後の復興時を髣髴とさせるといったところでしょうか。あちらこちらの歩道が掘り起こされていて、歩くのにも一苦労という場所が何箇所もありました。日本の 1980 年代のバブル時期もそうでしたが、こうした開発がいったん始まると、次第に発展・開発そのものが目的となってしまうように思われます。モンゴル人は元来、草原が根絶やしにならないように土地を非常に大切にしているのだけれども、鉱山開発が外国人資本によってなされ、土地が掘られることに大変違和感を感じるという話を現地で聞きました。今でも様々な風習が人々の暮らしに根付いていて、例えば、遠くに出かける前には近くの塔の周りを何度か回ってから出かけるとのことです。こうした風習を無意味といってしまうことは簡単ですが、風習を守ることで、自分たちの古来の文化、精神性を守っていくという意味があるのだと考えると、急速な発展・開発の中で、自国のアイデンティティーを保つことを目指すことは大変意味があると思われます。

そうした背景の下で、モンゴル国内では大学も含めた教育制度を変化させようという動きがあるようです。前モンゴル文部大臣であったモンゴルビジネス大学(MBI)の理事長は、これまでの教育では学生の知識・スキルは養えても、態度・志向性あるいは人格形成の教育に欠けているとの感想を述べられていました。日本では最近、大学生の学士力が定義され、「知識」、「汎用的技能」、「態度・志向性」、「総合的な学習経験」を指針としていますが、モンゴルにおいても教育が目指す方向は同じであると感じました。MBI で行われた教育の国際会議において、学生の能動的な態度を育成するということと、社会人の生涯学習を同時に実現する我々の取り組み「学びのコミュニティー」が注目され、モンゴルの文部大臣（代理）と国会議員が興味を示し、またテレビ取材なども

ありました。今回、教員だけでなく、学生の塩川さん、地域社会人の仙才さんが参加され、また国際会議で発表したことで、私たちの取り組みの成果を示すことができたと思っています。

草原に出かけてゲルと呼ばれる家でご馳走になり、草原での暮らしを窺える機会がありました。ただただ広い草原の中、ゲルを中心とした心地よい空間を楽しませてもらいましたが、これはモンゴル人の世界観に深く刻み込まれていると思われます。滞在した宿には連日世界各国から多くの旅行客が訪れ、毎朝草原ツアーに出かけていく姿を見かけました。この草原文化は、多分モンゴルにしかない固有のものだと思われます。モンゴル人の中で持続可能な社会を目指す世代を超えた学びあいが続き、誇りを持ってこの草原文化が続くことを願わずにはいられません。

（斉藤隆仁）

モンゴル

初めてのモンゴルで驚いたことは２つ。１つは実に多様な民族が混じり合っていること。つまりその顔。毎日ウランバートルの町をあちこちと歩いたのだが、すれ違う人々の顔を見るのが楽しく、これが大陸なんだと実感した。もう１つは車の大混雑。道路は毎日がナダム*であるかのよう。かつて遊牧民だった人々が今は都会に住み、道路を草原と同じように疾走する。車は競走馬。我が勝つ！の勢い。

モンゴルは、本当に急激に変化していることが肌で感じられた。人力で地面を掘り返している工事現場の反対側で、高級ブランドのデパートが立ち並んでいる。夕方になるとストリートチルドレンがどこからともなく現れ、自分の前に箱を置き、歌を歌う。彼らが歌う歌は、去年、韓国で出会ったモンゴルの留学生が歌ってくれた、遊牧民の歌に良く似ていた。風の音のような歌だった。

何か目に見えない大きな力に引っ張られて、モンゴルはどこかに向かって進んでいるようだ。町の姿も、遊牧民の姿も、教育の在り方も。前を見て、すごい勢いで進んでいる。かつて日本も、前を見てすさまじい勢いで進んできたのだろう。我が勝つ！という勢いで。周りを見ることを脇に置いて。

モンゴル＝遊牧民という私たちのイメージは崩れつつあると感じた。そうでありながら、人々は受け継がれてきたアイデンティティーへの強い誇りを忘れまいとしている。様々な矛盾を抱えながら社会の進む先を探ろうとしているモンゴルの今は、私たちの社会が抱える問題と共通の課題を孕んでいるように見えた。　　（光永雅子）

＊ナダム・・・競馬やモンゴル相撲などが行われる、モンゴルの伝統的な祭り

モンゴルを訪れて

私はまだ大学に入学したての一年生の身でありながら、異文化交流の授業を通して知り合った大橋教授を始めとする素晴らしい方々のおかげで、モンゴル訪問というとても貴重な機会を与えていただけた。今回、モンゴル滞在のレポートということで、モンゴルを訪れてみて非常に印象深かったことについて記そうと思う。

モンゴルでの一週間というのは感動の毎日であったが、その中でも特に印象に残っていることが２つある。１つ目はモンゴルの人々の気質である。今回、モンゴルを訪れるにあたって、訪問・滞在経験のある大橋教授と社会人の仙才さん、モンゴル人留学生の Shiirev さん以外は初のモンゴルだったのだが、初対面にも関わらず行く先々で出会う人々がみな温かく歓迎し、手厚くもてなしてくださった。彼らの性格は非常に気さくで大らかで、モンゴル人であることに誇りと自信を持ち堂々としていて、日本人にはないものを感じた。２つ目は首都と郊外の違いである。それまでモンゴルと聞くと、イメージとし

ては、広大な草原、遊牧民、移動式住居のゲルなどを浮かべがちだった。今回、モンゴルを訪れてみると、首都のウランバートルでは大きな道路と建物が広がり、見たこともないような数の車が行き交い、想像もしていなかった光景が広がっていた。今まさに経済発展しようとしている国の勢いを目の当たりにした気持ちになった。その一方で、車で数十分走って郊外に出ると、伝統的なモンゴルの生活が営まれていた。経済発展を経る中で、こうして昔ながらの文化が同時に存在しているあの光景というのはとても貴重なものではないだろうか。

今回のモンゴル滞在中に、モンゴルという国を肌で感じ、見て、考え、そして日本や自分を省みた。また日本語学科の学生さんとの交流があったのだが、短い時間ではあったものの、自分にとてもいい刺激となった。それぞれの夢に向かって着々と成果を残している彼らの姿は見習うべきものがあった。自分自身の成長を望み、地元から遠く離れたこの徳島大学に入学したが、この体験は自分にとってとても大きな自信となったように思う。この一回にとどまらず、今後とも国境を越えた交流を重ね、学び合っていきたい。(塩川奈々美)

モンゴル写真集

編集後記

２週に渡って海外出張報告第２弾！ーモンゴル編ーをお届けいたしました。首都ウランバートルの急激な変化を取り巻く、どこまでもどこまでも広がる静かな草原。その境界線は今、確実に広がり始めています。スカイプ交流から発展した今回の渡航は、画面の向こう側の現実を知ることの重要性に気付かせてくれました。(光永)